

【投稿論文】

## 「CMCと宗教」研究の視角

田村 貴紀

### ■ 1 問い

インターネットに代表されるコンピューター媒介コミュニケーション(以下 CMC)が普及するにつれて、宗教との接点も生まれるようになった。とくに事態が進展している英語圏に於いては、広範な関係が生まれ、関連する学術論文も書かれるようになった。

一つは、キリスト教に関連するものである。R.シュローダー [Schroeder, 1998] の論文はもっとも新しいものであるが、MUD<sup>(1)</sup> 上でおこなわれているキリスト教の礼拝をテキスト分析し、従来教会の礼拝との比較をした。H.キャンベル [Heidi. Campbell, 1998] は、Community of Prophecy というペンテコステ・カリスマ運動的なメーリングリストを取り上げた。そのグループは、現世的な世界を忌避し、靈的な世界を志向する傾向がある。彼らにとってインターネット上の「ヴァーチャルな」空間は、現世のようなノイズが無いという理由で「靈的な世界」に近いものだと考えられている。つまり、Virtual = Spiritual というような認識である。

もう一つは、ニューエイジや精神世界に関連するものである。スティーブン・オーリアリー [O'Leary, 1996] は、コンピュサーブ上で儀式を行ったフルムーンクラブというニューエイジグループのログの分析を行った。その儀式においては仮想のろうそくやパンが使用可能であり、言葉によって空間が聖化される。オーリアリーはプロテスタティズムと出版文化にによって分離された、言葉とシンボルとの再統合がインターネット空間上で行われうる可能性について指摘した。また、田村 [1999] はパソコン通信上で活動しているチャネラーの事例を報告した。その中には、預言と、会議室への書き込みを一定のフォーマット

に従って行うことによる自己観察のプログラムとがある。

もうすこし精神的相互行為全体に枠を広げれば、テキストによるやりとりが、セルフグループ的な治癒的効果を持つということについて指摘されている。この具体的な事例は、田村 [1996]、デンジン [N. K. Denzin, 1998a, 1996] などにあげられている。また、日本においては、今後携帯電話などの移動体通信によってインターネットが普及していく傾向が予測される中、A.A. (Alcoholics Anonymous)において携帯電話が相談に利用されていることに関する指摘も示唆的である [葛西, 1997]。

教団のインターネット利用に関しては、ザレスキー [Zaleski, 1997]、田村 [1997b, 1998]、黒崎 [1999]、米国のキリスト教ウェブサイトへのアンケートを実施した川島 [1997] がある。黒崎を中心とする國學院大学日本文化研究所の共同プロジェクトでは、天理教、神社に関する調査が進んでいる [黒崎, 1999] <sup>(2)</sup>。

このように実証的研究が、少しずつ積み重ねられつつあるとはいえ、依然として調査・収集をもっぱらにすべき段階であり、方法論について論じることは、時期尚早という見方もあるだろう。しかし、調査研究と方法とは不可分なものであるので、現段階の調査に於いても、何らかの方法・分析視角を、少なくとも背後仮説として抱きながら行っているということも事実である。この時点に於いて可能な限り「CMCと宗教」研究の視角について整理することは、調査の進展につれて批判され乗り越えられるものであっても一定の意義があると考える。本論では一つの試論を提示したい。

まず、全体の議論の前提として、インターネットを中心として、メディアと社会相互関係について数点を指摘したい。もとより、インターネットのメディア特性などについて、哲学的・認識論的に論じることは筆者の意図ではなく、実証研究の準備作業を目指しているものであるが、メディア研究の視野として必要と思われる、若干の考察を提示したい。

## ■2 メディアと社会の連動的変容

### ●2-1 CMCが埋め込まれていく社会

CMCが、あるスピードをもって日本人の生活に浸透しつつある。米国と比較して通信料金が高額であることが利用上のネックになっているが、電力会社、ケーブルテレビなどによって、NTTに代わる通信回線の提案がなされ始めている。ケーブルテレビなどのインフラストラクチャーが存在する都市部などでは、すでに「常時接続の環境でインターネットを始める」という例も出始めている。遠藤薫がいうような、「CMCが、多様な社会的場面において顕著に増大した社会」〔遠藤,1998b〕にますますなりつつあるだろう。

しかし、インターネットが普及するのであると考えるのは、単に個人にとって新規で利便なメディアであるからではない。遠藤〔1998b〕は、このCMCの増大に関して、二つの指摘を行っている。

一つは、インターネットの歴史的形が、「国家」「企業」「科学技術」「民主主義」という、四つの近代的論理の相互作用の中で行われていることである。インターネットは戦後の冷戦構造の中で国家的戦略として生まれた。1991年以降のソ連崩壊のあとでは、非軍事的な国家戦略の核として転換する。しかし、科学技術を主導した人々の間では、むしろ自由のためのテクノロジーとして成長していった。インターネットに関する技術的提案は、すべてネットワーク上に公開され、コラボレーションの場を提供した。この自由のためのテクノロジーは、米国西海岸を中心とする若者文化と結びつき、市民のためのネットワークという発想を生んだ。市場とインターネットが接続したのは、1991年と遅い時期であったが、その後市場的な展開を遂げた。また国際金融のシーンで決定的に重要な役割を果たし、世界経済に与える影響の大きさからその問題性が指摘されている〔相田 et al., 1999〕。つまりインターネットの普及は、近代化自体のダイナミクスと密接に結びついているというのだ。

近代的な社会は、出版メディアやマスメディアによって、地縁や血縁という伝統的共同体が脱埋め込み化され、抽象システムの中へ吸収される過程だというのが、近年の社会学的知見である。近代は、いわばバーチャル化の過程であ

り、CMCが普及した世界は、その延長線上にある〔遠藤,1998a〕。

遠藤が指摘するもう一点は、95年度SSM調査からみた日本の現状である。パソコン・ワープロを所有している「情報コンシャスなグループ」は、学歴、収入、財産などが高く、自己評価も高い、社会内で優位な階層を形成している。しかし、価値志向という点では、階層帰属意識が高いグループは、「階層志向」「脱階層志向」を併せ持っているのに対し、「情報コンシャスなグループ」では、「脱階層志向」が顕著であり、現状変革志向的である。したがって、「情報コンシャスなグループ」が社会における「優位/活性的な」グループを構成し、そのライフスタイル戦略が社会全般の潮流となる可能性があることである。つまりインターネットの普及を促す社会意識が、形成されつつあるということである。

このようなマクロ的な視点に加えてややミクロ的に考察するならば、CMC上に他者との関係欲望を充足する空間がひろがっているという点がある。

メディアを通した人間関係が、対面による関係に劣らないほど人々に重要性を持つということは、電話の普及と個人化、消費的使用によって始まったことであり、CMCにおいてもこのような現象があることは、繰り返指摘されることである。グローバル・メディアと称されるインターネットを使って、むしろ分化した人間関係が結ばれていく。時空を越えて、どちらかといえば地縁的な人間関係が広がっていく。しかも、それは時として、対面の関係と同じ重さを利用者に感じさせる。個人的なメディア利用という観点では、この利用形態がインターネットの普及を促すだろう。

さらに今日に於いては、電話や電話による他者との関係空間とCMCとの接合という現象があげられる。「おしゃべり電話」〔若林,1992〕として指摘される、他者との関係欲望を電話の中で充足させるような電話の使用は、携帯電話の普及に伴ってさらに拡大しているが、その携帯電話で電子メール・WWWの閲覧が可能になったことは、CMCをさらに身近なものにしている。

米国においてデスクトップ型のコンピューターによって市民の間に一般化したCMCは、日本に於いては携帯電話のような身につけるメディア、手のひらのメディアによって一般化しうるだろう。それは、より軽便な環境からスタートできるという後発者利得であると同時に、日米間での発展の相違としてとら

えることができるものだろう。電話というきわめて日常的なメディアが、すなわちCMCであることは、デスクトップ・コンピューターという敷居の高い機械を使うことと比べて、CMCをより日常的なものにする。

CMC自体の中にすでに他者との関係欲望を充足させるものがあるが、携帯電話やゲーム機など他のメディアとのボーダーレス化によって、その現象はさらに広範化するだろう。最近インターネットのチャットを利用していてストーカー被害にあった女性が使用していたのは、ドリームキャストというゲーム機であった。

このようにマクロ的にもミクロ的にも、CMCは社会の中に浸透し一般化していき、それにつれて人々の受け止め方も、当初の新奇性を持つメディアとしての受け止め方から、電話が日常的であるように日常的なコミュニケーションの手段になっていくだろう。

## ●2-2 メディアと社会の連動的変容

とはいえ、筆者は、メディアを社会変容の独立要因としてとらえるようなメディア決定論者ではない。[吉見1996]、[安川1999]がいうように、相互作用的に連動するダイナミクスの中に、メディアと社会の関係はあると考える。

安川は、フランスのビデオテックス・システム(テレテル)に関するフィーンバーグ[Feenberg,1991]を引用して次のように説明する。

このシステムは効率性や合理性といったテクノロジーの単一的・一般的基準によって決定されたわけではなかった[Feenberg,1991]。その普及過程は、ビデオテックスという定義済みテクノロジーがまずあって、それが適用され定着していくといった過程ではなく、むしろその社会的(再)定義づけが進められていく過程であった。しかもこの社会的(再)定義づけに際しては、競合しあう複数の定義が、様々な社会ヴィジョンをもつ様々な社会層・勢力——技術者、政府・官僚、フランス・テレコム、サービス提供会社、情報提供会社、ユーザ、等々——から提示された。すなわち、ビデオテックスという新しいメディアが社会に導

入一定着し、それによって社会が変容するという過程は、メディア／テクノロジーによる決定論的過程ではなく（もしくは技術者たちのヴィジョンが一方向的に受け入れられていくという過程ではなく）、多様な社会層・勢力のヴィジョンや活動を巻き込んだ、このメディアの社会的（再）定義づけ（＝社会的構成）の全体的過程だという。議論の要点は、このメディアがどういった社会層・勢力の担うどういったパースペクティブ（複数）とともに社会過程に投げ入れられていったのか、この過程がいかなる展開をみせ、その結果どのような定義を与えられるにいったったか、ということにある〔安川・杉山,1999:77〕。

安川は、引き続いて電話や自転車の例を挙げ、そのようなテクノロジーは、最初から技術的社会的に明確な定義（メディア特性）をもっていたのではなく、様々な勢力と志向が交錯する中で、新しいメディアの社会的定義が徐々に構成されていくのだといい、これをフィーンバーグにならって、「テクニカル・コード（技術的慣行／規範）」の定着と呼ぶ。そしてこのようにメディア決定論でもなく、社会決定論でもない連動する社会的構成過程を「メディア・社会インターフェイス」とよぶ。

他方、吉見〔1996〕は、シャルチエ（Chartier, R.）の読書に関する知見を引用して「シャルチエが示したように、メディアは社会を構成しながら社会に構成されているのであり、このメディアと社会の相互に文脈的な関係を立体的に把握することが」必要であり、「電子情報化を電子メディアによる文化変容としてとらえるこれまでの視点から、これを様々な社会空間での解釈や使用の実践を通じた電子メディアの重層的なコード化／脱コード化の過程としてとらえる視点へと移行していく必要がある。」と述べている。

このような、メディアと社会の関係性を前提として、CMCと宗教に関する議論を進めていきたい。それは宗教教団・信者生活が、CMCによって変容させられ、本質を失ってしまうのではないかと不安に感じる悲観論や、これまでの宗教のあり方が、未来的テクノロジーによって飛躍的な可能性を得るのではないか、という楽観論ではない。そうではなく宗教団体・信者がCMCを利用する中で、どのようにそれを定義／再定義するのか、その再定義という主体的行動

の過程で宗教に訪れる変化や可能性は何であるのか、という観点である。

したがって、CMCのメディア特性には十分に目配りをしながらも、なにかこれまでのメディアとは全く違った特異性をそこに措定しているのではない。吉見、安川が示すところは、これまでのメディア特性の議論を、我々がメディアを再定義する過程として相対化しうる視点である。そしてこのことは、「CMCと宗教」というトピックの、研究対象としての重要性を失わしめるものではなく、むしろより深刻なものにする。つまり問題は、「よくわからないテクノロジーのあるかないかわかりにくい影響」ではなく、われわれの生活世界に於ける意味形成のプロセスである、ということになるからである。

### ■3. CMCと宗教

これまでCMCと宗教を論じる場合、取り上げられたトピックはおおまかにいって3つある。さきに先行研究の紹介で述べたように、

1. CMC上で形成される人間関係（相互作用とアイデンティティ）。
2. 儀式やシンボルの意味形成。
3. 組織変容あるいは、人の出会い方の変容。

の3点である。先行研究に於いては、この3点はどのように論じられてきたのだろうか。先行研究の要点を紹介し、方法論的な考察をしたい。

#### ●3-1 CMC上で形成される人間関係の問題

CMC上でのある強度をもった人間関係については、かねてから関心と呼び、それについての研究もある。研究者によっては、それをバーチャル・コミュニティとよんでいる [Parks, 1996]。それは、なにもコミュニティなどと呼ばなくても、「相互作用」や「人間関係」といえばすむことであつたり、マッキーバー (MacIver, R. M.) の定義に従えば、コミュニティというよりは、アソシエー

ションという方がふさわしい場合もある [安川・杉山,1999:106]。それにわざわざコミュニティという用語を使うことは、開拓者精神的な [遠藤,1998b] 一つの意味付与行為であり、前述のようにメディアを定義する行動の中でイデオロギ的に発生したものである。

従って筆者は、バーチャル・コミュニティという概念の是非や、実態の有無について問う立場にない。しかしそれが、そのような予言の自己成就的傾向の中で形成されてきた概念であることを考慮に入れながらも、CMC上でのある程度の強さの人間関係があることを否定するものではない。そのような人間関係を作り出すものとして人々が、CMCを使用しているという意味であり、多元的な人間関係の局域の一つを作り出しているという意味で、社会学的・宗教社会学的な考察の対象である。

このようなCMC上の相互作用が心の状態に及ぼす影響については、田村 [1997]、デンジン [1998, 1999]、リーガル・アドボカシー育成会議レポート [1998] などがある。これらの研究は、伝統的な宗教団体・信徒のコミュニケーションそのものではないかもしれないが、今後その対象を研究する場合の枠組みとなるものである。同時に、下記に述べるような精神的相互作用を宗教的コンテキストで考えること自体、現代的な宗教性研究の一分野である<sup>(3)</sup>。

デンジンは、Alt.recovery.codependency (a.r.c) というインターネットのニュースグループの投稿を分析した。それは Adult Children of Alcoholics (ACOA) や、Co-Dependents Anonymous (CODA) などのセルフヘルプグループ運動の精神によって開催されているニュースグループである。デンジンは、そこには、自己物語の語り直しがあり、セラピーが行われる場所のひとつであるという。

私は、この新しい情報テクノロジーが、その場所以外では語られることがない新しい自己物語の生産の場所になっていることについて、以前に書いた。 [Denzin, 1998]

(...略...家族機能の障害やアルコール依存症などを病理として考える傾向は米国に一般化していたので) 一旦テクノロジーがそれを可能にすると、そのような病理モデルを当てはめて考えることができるような家族がインターネット内に広がっていった。a.r.c.内でのサイバート



ークは、三つの主流な医学的トピック、依存症、セラピー、そして家族に関するものである。我々の間に一般化している共依存の病理は、緩和のためサイコセラピーを必要とするものである。Alt.recovery.codependency は、このようなセラピーが発生している場所の一つである。バーチャルリアリティは、リアルワールドで起こった心の裂け目を修復する手伝いになっている。それは、読みとられ、議論される書き言葉によるトーキングセラピーと呼べるものである。

[デンジン, 1998b:108 田村訳]

a.r.cのようなCMC上のニュースグループ<sup>(4)</sup>などでは、CMCが無かったならばあり得なかったような、新しい自己物語が作成される場であるというのだ。

デンジンは、二つのスレッドを取り上げて細かく論じている。一つのスレッドの中では女性同士が自分の個人的体験を語り合いながら、共鳴し、ジェンダーを帯びた会話の中で家族、病気、快復について語る。男性の干渉がない状態で、女性としての経験を共有する。会話からは、回復の途中にある人が発言する言葉を読みとることができる。そこには彼女たちと彼女たちの状況についての発言が含まれる。もう一方のスレッドでは、感情的な激しい議論が行われるが、会話を始めた人物はそれを通して対面での人間関係に関する手がかりを得る。

同様な現象を筆者も指摘した。田村 [1997] は、日本のパソコン通信上のフォーラムのうち、女性専用のフォーラムについての分析を行い、そのなかで一つのスレッドをとりあげて、そこでの相互作用について記述した。

そのスレッドの中で、ある女性が自分と母や親との問題を取り上げて話題にした。他のメンバーとのやりとりの中で、共振・共感体験、自分史を語ることの作用、個人の問題の社会性や構造的等の発見などによって、自分の性格の個人的問題として自分史を語り始めた彼女の「母親解釈」は、変化を見せる。

最初の発言の際には自分の状況について全く絶望していたが、次第に自分を愛し味方してくれる家族について書くようになった。母親にたいする理解も変化し、寛容さを示している。そして、最後に他のメンバーへの感謝の言葉を述べている。他の女性との相互作用が、彼女に大きな心理的影響を与えていると

いえる。そして共振し、共感する関係であることは、他の参加者にとっても心理的影響を受ける関係である。別の発言者は、このコメント・ツリーのなかで、「養父母との関係をとらえ直すことができた」といっているし、また、もう一人は、「ずっといいたかった話」をすることができたと述べている。

また、「精神医療ユーザーのためのページ」<sup>(5)</sup>というウェブサイトを設定し、掲示板を作って「ひきこもり」の人々の交流の場を作っているリーガル・アドボカシー育成会議 [1998] は、その高揚について下記のように書いている。

(略) 第一に、コミュニケーションにおいて平等に参加することが可能になる。第二に、個人のコミュニケーション上の問題や障害を軽減することができる。まず、地理的・時間的な差異・格差はなくなる。そしてホームページという形で不特定多数の人々に公開されていることで、どこの誰でも、アクセスすれば同じ情報を得られる。また、情報を受け取るだけでなく自らも発信できる。声の大きさや身体（ひいてはその人のグループ内・社会的な地位）は表れず、それぞれが平等に発言のスペースを与えられるので、それぞれの参加者の発言の位置は基本的に対等である。参加の平等は、個々人がつながりあうときの敷居を低くするし、反対に、敷居の低さは参加の平等を促す。さらに匿名的であることが、敷居の低さをもたらす。匿名性は、主に文字、しかも規格化された電子画面上の文字を使うことによって成し遂げられる。書かれたメッセージの中に、名前や声や身体から筆跡まで、それを書いた者の痕跡は消えてなくなるのだ。また、発信する者も匿名的だが、それを受け取る側も匿名的に現われる。ページによっては、1日に数百人もの人々が見ている場合もあるが、それほど多くの人が自分の前にいるという感覚は非常に希薄になる。発信しようとする者の目の前にあるのは、ただモニターの画面があるだけである。

このように、匿名性を保ちつつ、しかし同じような問題を抱えた不特定多数の人々と対等な関係の上でゆるやかにつながることによって、これまでの生活では語ることでできなかった思いを語る事が容易になる。上に挙げた性質は、AA（アルコール・アノニマス）などに代

表されるセルフヘルプ・グループにも共通する部分である。〔リーガ  
ル・アドボカシー育成会議レポート,1998:38-39〕

ここでいう「癒しの関係」を、改めて定義するならば、「共振共感関係の成立から、問題の一般化へ、そして自己観・他者観の変化というプロセスの中で、自己と他者・世界との関係が修復される」ということが行われる関係であるということである。

そして、そのような関係が成り立つためには、確かにCMCのメディア特性というものが関与している。時間空間に制約されずに会話をし、社会的地位や男性の評価的「まなざし」から解放される。匿名性によって秘密事項が反転する世界では、対面のコミュニケーションでは常識的な共有事項である本名や、住所が最大の秘密となり、逆に、通常語られることのない個人の内面が深く語られることになる。

しかしそうであるが故に、全体社会と離れた特殊な領域の特殊な現象と考えられやすい。しかしそうではない。筆者の前提とするインターフェイスのメディア観からもそれはすでに理論的な前提であるが、もう一点別な論点をあげよう。

CMCを「肉体無きバーチャルな世界」とすれば、それと対極にあると考えられているであろうものが、「からだ」である。野口整体やヨガ、氣功、また摂食障害のセラピーなどでも「からだ」をある現実性の基準としてとらえる。しかし、たとえば自己物語論の視点をとれば、それは自己物語を語りなおすための転回点のようなものである。苦痛を引き起こす自己物語は、より生きやすいものに語り直されねばならないということになる。しかし、自己物語には、長い間かけて作った自明性があり、それを崩すことは難しい。そこで、「からだ」という言葉が、一つのレトリックとして機能している。「からだ」というレトリックを使うことで、自己というものを相対的にとらえ、自己物語の変化を容易にし、語り直される自己物語の自由度を高める。そこに身をゆだねることで、これまでの自己物語にしばられることなく、語り直せる地点である〔久木元,1996〕。

現代の自己は「からだ」に対しては人工物として、「CMC」に対しては自

然として規定される。「からだ」と「CMC」は、「自己」を映し出す、二つの鏡であるにすぎず、その属性の相違として考えられているものは、自己のどの部分を投影しているか（自然か人工物か）という問題でしかない。いずれも、自己物語を語り直すのに必要な、自己を相対化する足がかりを提供する。つまり一見全く別の方向を向いている「からだ」と「CMC」の二つの癒しの物語は、実は同じ指向性の二つの表現であると考えられる。

しかし、利点ばかりが見いだされているわけではない。デンジンは、その欠点について下記のように書いている。

1. 他のメンバーを攻撃する人が現れること。あるいは感情的な議論。
2. セラピー用品の販売のCMC上のマーケットがあること。
3. 家族、自己、親密性に関するディスコースが男性によって支配されることがあること。
4. 感性の強い人が間違ったアドバイスを受けたときの大きな悪影響。

[Denzin,1998a:116]

また、リーガル・アドボカシー育成会議も次の様な点を指摘する。

（対面のセルフ・ヘルプグループの場合には）時間と空間の限定、有名性、記録の困難などの結果として、参加者が限定される。このことは、グループの目的や参加者の属性を明確化することを可能にする。限定されていることで、グループ内の相互作用が活発になったり、成長が促されたり、社会に対する力を持てるようになれる。セルフヘルプ・グループでは、グループとしてある程度参加者が限定されていることが重要になってくる。というのも、公式／非公式に、そのグループの中でのしきたりや作法が形成されており、参加者はそれののっとって行為するが、参加者の回復にとってそのこと自体が有効に働く。特に、AA系のグループにおいてはそのことが明確化されている。しかしそれが可能となるには、あらかじめ目的や参加者の属性が明確であり、それらが共有されている必要がある。しかし一方、ホームペー

ジ上の掲示板では、参加者をしぼることができないために、その目的や参加者の属性が不明確になっている。[リーガル・アドボカシー育成会議レポート,1998:40]

ここでの要点を整理すれば、CMCの中に、人々は対面の人格や人間関係に影響を及ぼす相互作用を構築することが可能であるが、それを可能にするCMCのメディア特性が逆に、その可能性を制限するものとなっているということである。

### ●3-2 儀式やシンボルの意味形成に与える影響。

CMCの中で、儀式あるいはシンボルはどのように表現されるだろうか。この問題について、まず三つの先行研究から知見を得よう。

スティーブン・オーリアリー [O'Leary, 1996] は、オング (Ong, W. J.) に基づいて印刷文化とプロテスタンティズムが分離した言葉と宗教的な力、言葉と象徴の再統合がCMC上に於いてなされる可能性を指摘し、その例としてニューエイジグループのCMC上の儀礼を取り上げた。彼がこれを例として取り上げたのは、米国の伝統的な共同体の中では、自分の信仰を表明しにくい団体の信者にとってCMCは一つの解放区になっていると考えたからでもあった。そのニューエイジグループの儀式で、テキストの交換によって空間を聖化するということが行われ、その儀式を信じるものにとっては、行為遂行的発話になる。オーリアリーはジョナサン・スミス (Smith, J.) を引用して、CMCの空間が、儀礼を生み出す背景のひとつとしてあり得るという可能性を示した。

ここで重要なのは、そこで展開されているのが、相互行為による意味形成が構造化されていることだ。CMC上の宗教行為というと、人は奇異なものであると感じるかもしれないが、行為遂行的発話によって宗教的意味が形成されているという点では、カトリックのミサと本質的には変わらないとオーリアリーはいう。CMC上ではカトリックのミサにおけるようなロケーションが存在しないということが相違として指摘されるわけだが、もう一つ違う点は、CMCの場合には、テキストとして構造化され、相互行為のプロセスが認識しやすい

ということである。

とはいえ、オーリアリーが分析したのは、テキストのみによるコミュニケーションの世界であり、画像、音声などを自由に扱えるテクノロジーの発展によって、より大きな宗教的可能性が生まれるだろうとしている。これがある程度実現された世界、つまりMUDの世界におけるキリスト教の礼拝を取り上げたのがシュローダー [Schroeder,1999] である。

シュローダーたちは、MUD 上で行われているキリスト教の礼拝について分析している。その特徴をあげると、

1. 週一回定期的に会合し、自由な出入りがはばかれるという厳肅性があり開始、過程、終了の宣言という時間的構造性がある。また各人の画像人格（アバター）は、画面上の祭壇画像の周囲に停止して礼拝をする、という視覚的規律がある。
2. リーダー、メンバーという社会的階層性がある。
3. クリスチャン・アイデンティティを共有し、反キリスト教的なものに反感を持つ。これが内部的な結合を作っている。
4. 「癒しの求め」などの表現に、テレエバンジェリズムの影響がある。

その礼拝はカリスマ運動的色彩を持っており、その特徴の1つとして女性の指導者を持っている。地上のカリスマの教会と比較するならば、下記の相似点、相違点をあげることができる。

1. 会合の構造性、礼拝内容、役割分担などは、従来の教会から流入している。
2. 参加者同士の感情的連帯の弱さ、交換する言葉が短くなること、祈祷会での秩序が比較的不足していることなどは、宗教的集会としての価値を低めている。これらのことは、メディア特性から由来するものである。
3. しかし、逆に長所も生まれていて、率直な意見交換、世界中から参加できること、既存の教会に比べて実験的なことがしやすい。

このような特徴をシュローダーは挙げ、従来の教会に参加するのと全く同じ経験をすることはできないけれども、その中にある本質的なものを別な形で提

供するものだと、結論づけている。

上述のような儀礼・礼拝は、言葉を中心とする。ひとつはまったく文字テキストのみの交換であり、もう一つはMUD上のアバターという画像人格を通じての行為であるが、分析の対象になったのは、やはり文字テキストの交換であった。Campbellの言うCommunity of Prophecy (CP)の場合、ビジュアルを伴わない、バーチャルな文字テキストの世界であるということにむしろ積極的な意味があると考え得る。オーリアリーの例でも、シンボルと言葉の再統合という感触を持つことができたのは、文字テキストの世界が生んだ逆説である。デンジンなどのあげるセルフヘルプグループの場合も、文字テキストの制限性がかえって治癒的效果に貢献している。

英語圏を中心とするこれまでの研究は、テキストによる相互行為を分析したものであった。そこにおいては、テキスト交換の特性とその宗教的活動とが、相互補完的に働いている。このような文字による相互行為のキーワードを一つ挙げるとすれば、「つながり」である。テキストの交換ということを通じて、「つながる」という感覚を持つことができるかどうか、「つながる」意味世界を構築しているということが問題になる。もう一つ重要なことは、オーリアリーのような英語圏の研究者にとって、言葉がもう一度シンボルと結びつくという状態である。

しかし、日本の場合には文化的背景が異なるので、違ったトピックを発見することが可能であろうし、英語圏において問題になることが問題にならないということもあるだろう。日本の場合、画像を巡る意味付与行為を発見することができるのが特徴的である。

たとえばホームページの活用が顕著な天理教の場合、本部の公式サイトにおいて、神殿のほぼ同時的な映像が、24時間放映されており、公式サイトに対するアクセスの中で、もっともヒット数が多いファイルになっているということである。

神殿放映を推進した本部職員は概要を次のように語っている。

特に海外で布教、信仰に励む人々のことを考えた。部外者にとっては、さほどの感慨を抱くことがないものであろうが、布教に携わるよ

うな信者にとっては、熱い思いをもって見つめられるものだ。たとえおちば帰りできなくても、天理教によって、生活が潤されることを望んでいる。

放映されている映像を見ることは、「おちば帰り」の代替物ではないが、身近に接するということが重要だ。おちばに流れる時を共有するということが必要である。

放映に関しては、楽しみにしているという声、月次祭のあとにみんなで見ると、という声が寄せられている。おちばに心寄せることでつながりができる。海外で孤立した生活を送る日本人にとって必要だろう。

[田村,1999b]

神殿映像の放映は、公式サイトによってなされているだけでなく、他のウェブサイトの中でも、しばしば神殿の映像が掲載され、公式サイト中の神殿映像放映にリンクが貼られている。さらに、「天理教フェローシップ」というロゴと番号によって、それぞれの教会・個人のサイトは自由に発言しながら、教団本部に結びつけられており、見るものをして神殿を中心とするリンクのネットワークをイメージせしめる。そして、このような神殿の中心性を支えているのが、天理教における建築物の表現性、伝達媒体性である。

天理教において、「建築」が極めて宗教的な意味を持ち、教理にとって重要な問題であることは、知られているとおりである [関,1992]。天理教における「建築」は、場所になった言葉とでもいうべきものであり、建築であると同時に伝達媒体であった。宗教的建築物には、あるいは一般的に建築物というものは伝達媒体性があるが、天理教においてはより強調されている。

また、神社のウェブサイトも、同様に画像を多く使用している。神社のサイトにおける、バーチャルお参りやおみくじうりには楽しみの要素が強く、神社という場所がたとえば近世において、相撲・小芝居・富くじなどの楽しみの場所であったことを、思い起こさせる。神社のそういう部分を引き出しているところに、インターネットのメディアとしての特色があるかもしれない。

比較的スムーズにインターネットの利用が導入されている天理教に比べて、神社の場合は一種の神学的議論が続いている [黒崎,1999:41-42] し、宗教として



の様々な違いから、色々な相違がある<sup>(6)</sup>。しかし、シンボルを巡るディスコースという点では共通性がある。東京神社庁のバーチャル参拝が載せられた産経新聞掲載の記事〔産経新聞、1997年8月24日〕でも、神社庁の批判と同時に複数の神社に寄せられている訪問者の声が載っている。それは、何らかの理由で神社に向向いて参拝することができない人々にとって、意味があるという内容のものだった。発信者によるシンボルの意味づけと、訪問者による意味づけのディスコースの中で、ウェブサイト上のシンボルが再文脈化される。ウェブサイト上のシンボルは、この自己言及的な過程によって再創造される。このことは、バーチャル霊園をもっている寺院や、天理教においても同様である。

シュローダーは、ミンスキー (Minsky, M.) のフレーム理論 [Minsky, 1975=1979] を援用して、MUDの教会の中でキリスト教会的な慣用語やいいまわしという、教会の提供する経験の一部を提示することが全体のイメージを換気させる力があることを紹介した。同様な説明が、この画像の例にも可能であるかもしれない。

このような、シンボルの再文脈化はインターネット上でのみ起こるようなものではなく、シンボルがメディアによって伝達されるという場合には必須のことであったと思われる。比較的最近の例を取れば、石井研士 [石井, 1998] が取り上げている、テレビ番組による季節感の創出ということがある。ある作家が「私の正月はテレビからやってくる」と述懐しているように「ゆく年くる年」というNHKの番組が日本人の正月を作り出しているという側面がある。しかもそれは、テレビ局の一方的な意図によって作られているのではなく、視聴者がそのことを望むことによって制作されている。この場合でも、ある種の構造化されてはいないディスコースが、シンボルを文脈化している。

インターネットの場合には、テレビにおいてはあまり構造が見えないディスコースが明示的なものになる。明示的になった構造は、さらなる自己言及化を促す。

インターネット利用に関する神社と天理教の議論には相違があるが、それはシンボルについての言説戦略の相違であり、それぞれの宗教がCMCを再定義する過程の相違であろう。ウェブサイトを訪ねることが、実際の参拝と違うことは、誰にとっても明白である。明白であるからこそ、「偲ぶよすが」と

いう意味づけや「疑似的行為」という意味づけをディスコースの中で行う。

CMCが宗教と関係していくことは、すべての宗教にとって同じ現象をもたらすのではなく、ある場合には文字を巡り、ある場合にはシンボルを巡るディスコースとして現れ、その違いはそれぞれの宗教の固有性に由来すると思われる。

#### ■ 4. 方法論的問題

ここまで記述した先行研究を振り返り、若干の方法論的問題について短く付け加えたい。

オーリアリーは、オング主義を援用して、メディアによる感覚変容を中心として、カトリック的な言葉とシンボルの再統合がCMC上でなされるのではないか、という仮説をたてた。デンジンは、「事例の方法」(method of instances)というエスノメソドロジーの会話分析に基づいて、CMC上のテキストを分析した。シュローダーは、ミンスキー [Minski,1975] の提唱したフレーム理論に基づいて、テキストの内容を分析した。また既存の教会から持ち込まれたものが何であるかを考察した。オーリアリーは、言葉のシンボル性に注目し、デンジンとシュローダーは、テキストの内容ではなく、構造に着目して分析し、関係性の構造を描写しようとしている。

これらの作業は、テキストを注意深く読み解釈することに依存している。これは、十分な意義があり、そこから理解できることも大きい。

しかし、デンジンやシュローダーは、CMCのテキストを対面の関係の会話分析と同じように扱っているが、それがどの程度可能であるかという点はテクニカルな疑問として残る。そう述べるのは、対面の関係と質的に異なる異空間であることを強調しようというのではなく、対面とCMCでは、関係性の構築の手順が違うからだ。

CMCの場合、非同期的なコミュニケーションと同期的なコミュニケーションの双方が可能であるが、それぞれの場合に、対面の関係とは異なる手順を踏んでテキストが形成される。

非同期的コミュニケーションの場合は、スレッドを連続して読めば、一定の会話の連続のように見える。この一定の時間を経過することによって蓄積したテキストをツリー状の構造として解読する。むろん、過去の記録をさかのぼって読み返すということは、研究者だけでなく参加者も間々することだが、そのテキストを構築していく中で参加者が経験することが、蓄積したツリーの構造から読みとれるものと同じものであるか、ということは問題である。同期的コミュニケーションの場合は、動的に行われる時間的推移の中に、関係構築行為があり、蓄積したテキストの分析は、時間推移が反映されないので、追体験と言いはない。いずれの場合も、対面関係の会話分析で行われるような、会話をビデオに撮り、再現するという時間的経過を伴う再現とは相違がある。

このような問題を克服しようとするならば、さしあたり二つの方法があるだろう。一つは積極的参与観察をして、自らの参加体験をも織り込んだ関係構築過程を記録する〔吉野 1998〕。もう一つは、テキストを書いた参加者との面接を行い、面接の中で体験を再現するという方法である。今後の調査の中で検討されるべき課題であると思う。

## ■ 5. 結び

相互作用的に連動するダイナミクスの中で、われわれの生活世界に於ける意味形成のプロセスとして、CMCと宗教の問題を考えようとしてきた。宗教団体・信者がCMCを利用する中で、どのようにそれを定義／再定義するのか、その再定義という主体的行動の過程で宗教に訪れる変化や可能性は何であるのか、という観点である。その際にとりわけCMCを取り上げるのは、近代社会を作り出していったパーチャル化の過程の現代的到達点としてあるからだ。

これまで見てきたように、そこには一定の相互作用、宗教的意味の構築が行われており、宗教社会学の対象として研究に値する分野であると思う。

ここで考えてきた、近代性との関連、意味形成の形式をとう視点は、メディアとの関連〔葛西,1998:135-137〕〔弓山,1999〕<sup>(7)</sup>、ゆるやかな共同性〔葛西,1998:138〕などを主張する現代の宗教性研究と広い意味で視野を共有するも

のであり、その一環として位置づけることが可能なものであると考える。この点について詳説することも次の課題としたい。

<注>

- (1) 複数の人びとが同時に参加でき、かつ相互作用できるネットワーク環境の総称で、テキストのみの交換のものと、画像を使用できるものがある。
- (2) 教団とCMCとの関係については、特定教団を対象とした十分な調査がまだ行われていないため、本稿では詳しく取り上げないが、今後の課題であると考え。
- (3) 島菌進 1996 『精神世界のゆくえ：現代世界と新靈性運動』 東京堂出版。
- (4) インターネット上の談話室で、多対多のコミュニケーションが可能である
- (5) <http://www.din.or.jp/~ladd/>
- (6) 特殊的宗教集団としての天理教と、従属的宗教集団としての性格もある神社との相違は考察に値するだろう。

また、その宗教の個性に基づく時間観念の相違ということもあるだろう。単なる写真でなくほぼ同時的な映像であることによって、信者は神殿の姿を偲ぶだけでなく、そこに流れる時間をも偲ぶことになる。このことは、天理教のもっている時間感覚によって意味を持たされている。早朝夕方のつとめの時間にファイルにアクセスすれば、神殿に集う人の流れを見ることができる。神社の場合は、日常的な毎日の時間よりも、ある選択された時間、ハレの時間が強調される。

- (7) 弓山は、「宗教と社会」学会第7回学術大会のワークショップにおいて下記のように述べている。

第四に、こうした匿名性と関連して、彼女・彼らの宗教性／靈性とマスメディアの関係である。そもそもこの二人を論じる際に留意しなければならないのは、当事者自身は何らニューエイジとしての自覚を持ち合わせていないということである。だが佐藤の出演した「地球交響曲 第二番」は一般にニューエイジの作品として理解されている。大徳寺もニューエイジ的内容を盛り込んだ情報誌で取り上げられ、「心のアーティスト」「いわゆるニューエイジ思想の最良の部分にも通じる」と評価される。そして何より大徳寺を扱った芹沢小説は「ヒューマニスティックな内容をヨーロッパ流の合理主義的

精神で照らし出す作風で知られる同氏だが、前記二作は同じくヒューマニズムに根ざしながらも、合理主義を越えて極めて「靈性」に満ちた内容となっている」と評されるのが一般的である。つまりすでに見たような彼女・彼らの何気ないメッセージに宗教性・靈性を付与するのに、マスメディアの果たした機能は無視できない。〔弓山 1999〕

## ■〈文献〉

- 相田 洋, 藤波 重成 1999 「リスクが地球を駆けめぐる」日本放送出版協会。
- 遠藤 薫 1998a 「仮想性への投企」【社会学評論】48-4: 50-64。
- \_\_\_\_\_ 1998b 「社会学はネットワーク社会をどう見るか?—ネットワーク社会のエートスと現実—」関東社会学会テーマ部会報告 1998.6.13 於日本大学。
- Campbell, Heidi 1998 "A Plug In, Log On, & Drop Out?: The Impact Of The Internet On The Religious Community" Presented at the British Association for the Study of Religion, [Online] <http://www.ed.ac.uk/~ewcv24/BASR.html> [received January 15, 1999].
- Denzin, N.K. 1998a "In search for the inner child: Co-dependency and gender in a cyberspace community." In G. Bendelow & S.J. Williams. [Eds], *Emotions in Social Life* [pp. 97-119]. Routledge.
- \_\_\_\_\_ 1998b "Cybertalk and the Method of Instances" In Steven Jones [Ed], *Doing Internet Research: Critical issues and methods for examining the Net*. SAGE Publications, Inc.
- Feenberg, Andrew 1991 *Critical Theory of Technology*, Oxford University Press.
- 石井 研士 1998 「情報化と年中行事」島菫進ほか【心情の変容—情報社会の文化4—】東京大学出版会。
- 葛西 賢太 1997 「自分というリソースをあえて開示すること」【情報時代と宗教】プロジェクト研究会 1997.9.2。
- \_\_\_\_\_ 1998 「精神世界」を支持するくゆるやかな共同性> 【宗教と社会】4。
- 久木元 真吾 1996 「レトリックとしての身体感覚」【年報筑波社会学】第8号: 179-198。
- 黒崎 浩行 1999 「日本宗教のインターネット利用の比較分析に向けて—神社ウェブサイトの場合—」【國學院大學日本文化研究所紀要】83。
- 川島 堅二 1997 「インターネットの宗教的活用の現状と可能性—アメリカのキリスト教会の事例研究」【人文学部紀要】第9号 恵泉女学園大学。

- リーガル・アドボカシー育成会議 1998 【精神障害者に対するインターネットの可能性に関する研究事業報告書】リーガル・アドボカシー育成会議 (LADD)  
(参考 <http://www.din.or.jp/~ladd/>)
- Minsky, Marvin 1975 "A framework for Representing Knowledge" in Winston, Patrick Henry  
*The Psychology of Computer Vision*, ミンスキー、マービン 1979 「知識を表現するための枠組み」【コンピュータービジョンの心理】産業図書 白井良明・杉原厚吉訳。
- O'Leary, Stephan. 1996 "Cyberspace as Sacred Space: Communicating Religion on Computer Networks", *Journal of American Academy of Religion* 64[4] pp.781-807.
- Parks R. Malcolm 1996 "Making Friends in Cyberspace", *Journal of Computer Mediated Communication*. <http://www.usc.edu/dept/annenberg/vol1/issue4/parks.html>
- Schroeder, Ralph et al., 1998 "The Sacred and the Virtual: Religion in Multi-User VirtualReality", *JCMC*.  
[Online:<http://www.ascusc.org/jcmc/vol4/issue2/schroeder.html>].
- 関 一敏 1992 「伝達媒体としての建築物-天理教の【神殿】【おやさとかた】普請をめぐる-【情報と日本人-現代日本における伝統と変容 8-】株式会社ドメス出版 43-59.
- 田村 貴紀 1997 「インターネットの宗教情報：その可能性と危険性」【宗教と社会】「宗教と社会」学会 Vol.3.  
\_\_\_\_\_ 1998 Article "How Does the Internet Work for Religions Based in Japan?" *Tsukuba Annals of Sociology*, vol.10.  
\_\_\_\_\_ 1999 forthcoming "Spiritual Network in the Internet Embedded Society- FARION Forum as A Case-" 「宗教と社会」学会 Vol.5.  
\_\_\_\_\_ 1999b 奈良県天理市 天理教海外布教伝導部における田村とのインタビュー 1999年3月13日。
- Turkle, Sherry 1995 *Life on the screen: idnetity in the age of the Internet*. SIMON&SCHUSTER.
- 安川 一・杉山 あかし 1999 「生活世界の情報化」児島和人編【講座社会学 8 社会情報】東京大学出版会, pp.73-115.
- 吉野 ヒロ子 1998 「現実の十分な複雑さ——チャット (IRC) という意味領域——」【Sociological Papers】 第7号 早稲田大学院生研究会 : 61-72.
- 吉見 俊哉 1996 「電子情報化とテクノロジーの社会学」井上俊、上野千鶴子、大澤真幸、見田宗介、吉見俊哉編【岩波講座 現代社会学22 メディアと情報化の社会学】、岩波書店。

弓山 達也 1999 「ニューエイジと救済宗教との間」ワークショップ：現代世界の宗教性/ 霊性—現代宗教研究への課題と展望— 「宗教と社会」学会第7回学術大会 於国際基督教大 1999.6.13.

(参考 <http://www.juen.ac.jp/shakai/kkasai/religion/NRCS/index.html>)

若林 幹夫 1992 「電話のある社会—メディアのもたらすもの」吉見俊也、若林幹夫、水越伸 1992 『メディアとしての電話』 弘文堂.

Zaleski, Jef 1997 *The Soul Of Cyberspace*. HarperCollins.

この研究は下記の助成を受けて行われた。

平成 10 年度財団法人電気通信普及財団助成 「コンピューターネットワークの普及と宗教的行の変容に関する調査研究」。

平成 11 年度文部省科学研究補助金基盤研究(B)(2)「高度情報社会と宗教に関する基礎的研究」。

平成 11 年度真如苑研究助成。

(たむら たかのり/財団法人国際宗教研究所)